

#22. スシ文化？

ジェイナ・トキエ・タナカ

「文化」の定義に関する講読の授業を受け持って以来、私はこの単語の使われ方に悩まされ続けている。殊にメディアであったり、マスコミ通の若者が使う場合である。このとても便利な単語があまりにも「中身がなく」なってしまう、書物の中で見かけたときは、読み続ける前に筆者が何を言いたいのかをじっくり考えなければいけないと私には思える。中には、あらゆる種類の現象に「文化」と付けなければならぬと感じている書き手がいる。これがこのエッセイの題名の由来である。こうした使い方を最初に目にした時から、私はそのことに当惑させられてきた。社会学者が使うようには、「文化」に取って代わる適切な単語がないので、社会学者の意味するところを維持しつつ、スシやクラシック・カーや馬について話したいときに使う別の言葉を探すのが良いアイデアだろうと思う。

社会学者は、ある集団とその他との様々な特徴を区別するのに文化という単語を使う。こうした特徴には、自分たちが他の人たちと同一集団に分類されるすべての要素が通常含まれるが、まず最も重要なのは言語である。というのも、言語なくしては同じ集団の他の構成員とコミュニケーションをとることができないであろうからだ。また、宗教が含まれたり、含まれなかったりするのだが、一般的な考え方がある。こうした考え方が、例えば、小さな子供に対して躰として暴力を振るうことの可否や、部外者を簡単に迎え入れることの可否を決定する。当該集団のほとんどの構成員が一般的に行っている慣習、衣食、居住の仕方、教育の種類、称賛される芸術——これらすべてが集団の文化の特徴である。あなた方はたぶん自分自身は日本文化の構成員だと考えるだろう。私は日系アメリカ人だと考える。私たちは互いの文化について学ぶことはできるが、文化を「変える」ことは難しいだろう。言い換えれば、異なる集団の中で成長してきた経験ゆえに、相手の文化の構成員として完全に受け入れられることは難しいだろうということである。最近の移民に加えて、日本にはその言語、慣習が理由で自分たちを日本人だと思えない大勢の住民集団がある。韓国・朝鮮系の日本人、中国系日本人、ブラジル系日本人などである。これらの人々は何世代かにわたって日本に住んでいるかもしれないが、私が自分を日系アメリカ人と呼ぶように、彼らもまた自らを外国人の血をひく者と認識している。さらに、青森、鹿児島、沖縄のようなある地域では、その土地の方言が標準的な日本語とかなり異なるので、国籍よりも言語が文化を特徴づけると感じる人たちもいる。こうしたことが、「文化の違い」や「カルチャーショック」や「異文化間コミュニケーション」について話すときに意味している文化なので、人々が最も身近に感じるべき文化の意味するものだ。

大きな文化的集団の中には、当然のこと、他の集団とは異なると識別される多くのさらに小さな集団が存在する。こうした集団は「下位文化〔サブカルチャー(sub-cultures)〕」と数十年前には

呼ばれたが、この「下位〔サブ(sub)〕」はとれたように思える。今では「企業文化(corporate culture)」や「学校文化(school culture)」、そして「メディア文化(media culture)」という言葉がある。「企業文化」は、専門用語、達成目標、販売手法など特定の企業で特徴的な言葉、考え、慣習をいう。グーグル、トヨタ、アリババといった多くの点で互いに異なる企業文化を思い浮かべることができる。一方、「学校文化」はあるべき学校の理想的な姿をいう。それは行うべき言葉遣い、果たすべき使命、そして実施すべき教育方法などのことである。これらの様々な未来像は1つの学校あるいは地域に限定されるものではなく、国境さえ越えるかもしれない。「メディア文化」はより容易に理解できる。なぜなら、「メディア文化」という単語を使う人たちによれば、それは一般のインターネットや特にソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)などの現代メディアを利用するすべての人間を含むからだ。この大きな集団の人々は国境など考慮さえないで互いにつながっており、彼らの大部分はコミュニケーションの言語として、どんな形態にせよ英語を使っている。特にこの「メディア文化」という語句は「若者」(若者のメディア文化〔youth media culture〕)と結びつくとき、インターネットを通じて友達や意義や個人的な楽しみを探し求めることにはまっている10代や20代の若者の大きなコミュニティのように、この集団はその姿がよりはっきりと見えてくる。彼らはたぶんこうした「文化」の一時的な構成員だが、今日の世界のほとんどの場所では際立った存在である。こうした種類の「文化」はまだ文化として認識できる。というのも、こうした文化はある種の言語や考えや慣習で集団の人々を包み込むからである。

しかしながら、人々が「スシ文化」について話すとき、私には、「スシ文化」という言葉はあまりにも漠然としていて、不明瞭過ぎてつかみどころがない。「スシ文化」を語るこの人たちは何者なのか。スシを食べるのだろうか。では、チーズを食べる人たちはどうなのか。チーズ・カルチャー(チーズの培養〔cheese culture〕に引っかけた駄じゃれ)はどうだろうか。彼らはどんな言葉を使うのだろうか。「スシーズ〔スシ語(sushi-ese)〕」(訳者注: Japanese や Chinese など言語の名称を表す英単語を形成する接尾辞の -ese を sushi の語尾に付けた造語)などとも呼ぶのだろうか。スシが世界を救うと信じているのだろうか。「しゃり(酢飯)」や「がり(生姜の酢漬け)」について話すのが癖なのだろうか。彼らは皆一口大の御飯と魚肉の特定の食べ方を共有しているのだろうか。私には、カリフォルニア巻、フィラデルフィア・クリームチーズ巻、シラチャソースをつけたスシ、ヨーロッパ風のスシ(御飯の代わりにパンで作る)、御飯なしのアフリカ風のスシ、その他ありとあらゆるスシを食べることによって、世界中の人たちが「スシ文化」の一部になろうとしている様子が思い浮かぶ。私は、こうした話がそれ自体いかに馬鹿げているかを示してくれると思う。私たちはどこまで文化という言葉の意味をゆがめてよいのだろうか。「スシが世界を席捲しつつある！」とまさに書くべきで、「スシ文化が世界を席捲しつつある！」と書く必要がどこにあるのだろうか。

かつてそうであったように、人々の分類を説明したい社会学者の活動領域で文化という言葉は用いられるべきだということを皆さんに納得してもらえればと思う。しかしなが

ら、こうした使い方がすでに日本語に入り込んでしまっているので、私の希望は叶えられないかもしれない。確かなのは、若者がマンガ「文化」について語っているのを金輪際聞きたくないということだ！